

九州保健福祉大学生命医科学部生命医科学科

所司 睦文*[§] 大野 節代* 大野 英治*

はじめに

九州保健福祉大学は宮崎県延岡市との公私協力方式により1999年4月に開学しました。母体は学校法人順正学園(岡山県)です。順正学園は「学生一人ひとりのもつ能力を最大限に引き出し引き伸ばし、社会に有為な人材を養成する」という建学の理念に基づき、時代の要請に応える教育および研究を通して、医療・保健・福祉に貢献できる多様な人材育成を実践しています。

現在、九州保健福祉大学は社会福祉学部、保健科学部、薬学部、生命医科学部、通信教育部、大学院、別科ほかを設置する総合大学となっています。

I. 生命医科学部生命医科学科

九州保健福祉大学生命医科学部生命医科学科は2015年4月、延岡市からの多大なるご支援を得て、九州では初めて、在学4年間で臨床検査技師と細胞検査士(日本臨床細胞学会認定資格)のダブルライセンス取得が可能な学科として、定員60名で開設されました(細胞検査士については、現在認可申請準備中)。専任教員は14名(教授10名、准教授3名、助教1名)です。

生命医科学科の開設に合わせて、生命医科学科学生の学内実習施設として、生命医科学11号棟が建設されました。1Fには、およそ100名が同時にできる実習室が3部屋、85台の光学顕微鏡、他を

常設した鏡検室(写真1)、安全キャビネット6台を配した培養室、学生ロッカーが、また、2Fにはおよそ100名が収容できる演習室(講義室)、細胞検査士試験に用いられる顕微鏡25台と多人数ティーチング顕微鏡を常設した細胞診講義実習室、ハイエンドモデルの各種の生理検査機器を配置した臨床生理検査室、その他、学生の自習室、50名程度の演習室・実習室が配置されています。

日本の臨床検査技師養成施設の中でも屈指の設備および最新医療機器が揃っていると自負しています。

生命医科学科と同時に、宮崎県より立地企業に認定され、かつ、多くの最新研究機器を備えた「がん細胞研究所」が開設されました。「がん細胞研究所」はがん幹細胞など最先端医療研究を行うだけでなく、再生医療分野でも形態学や分子細胞病理

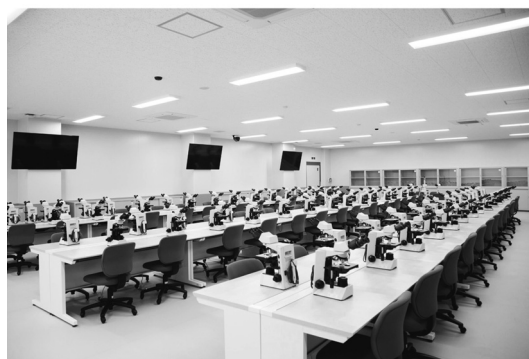


写真1 生命医科学11号棟1F鏡検室

*生命医科学部生命医科学科 § shoshi@phoenix.ac.jp



写真2 がん細胞研究所の実験設備(一部)

学などを導入して iPS 細胞(人工多能性幹細胞)のがん化分析など最先端の研究に取り組んでいます(写真2)。その成果を教育に還元することで、がん早期発見のスペシャリストである細胞検査士の育成を目指します。

II. 教育内容と特徴

九州保健福祉大学生命医科学部生命医科学科は4年間で臨床検査技師、細胞検査士として、医学研究および医療現場において貢献できる人材の養成を目的としています。本学科の学生は臨床検査技師および細胞検査士に必要な医学的知識および臨床医学の理解に不可欠な知識を修得します。そして、それらの知識を基にした多岐にわたる学内実習(写真3)と臨地実習(病院実習)を通して、医療現場で必要とされている知識と技術を学びます。4年次では、それまでに培った知識と経験を踏まえて卒業研究を行うと共に、臨床検査技師および細胞検査士の資格取得に向かって、鋭意、取り組んでいきます。

ところで、本学はチュータ制を取っており、入学直後から学生の学習面および生活面で、学生部または教務部、健康管理センターほかと連携しながら、きめ細やかな支援体制を実現しています。また、就職については、大学キャリアサポートセンターが学科と連携を取りながら、学生の就職活



写真3 学内実習風景

動をバックアップしています。学生の大学院進学については学科の専任教員が積極的にサポートしていく予定です。

III. 今後の課題

九州保健福祉大学に九州では最初となる臨床検査技師および細胞検査士を育成する生命医科学科が新設されたことに対する、延岡市または宮崎県の期待は計り知れないものがあります。それにこたえるべく、努力していかなければなりません。まずは、いかに第1期生を育て上げるかが、私たち学科専任教員の大きな課題です。

4年後の完成年度に向けて、学内実習を如何に円滑に効率的に組み立てるか、臨地実習の受け入れ施設との最終調整、就職・進学支援など、ひとつひとつクリアしていくこととなります。

生命医科学科に入学した学生をしっかりと育て上げること、即ち、臨床検査技師のみならず、希望する学生には細胞検査士のライセンスを取得させ、宮崎県をはじめ全国へ送り出すという成果を積み上げていくことが、極めて重要な課題になると思われま

おわりに

九州保健福祉大学は地域密着型大学です。地域に開かれた大学または学科として、生涯学習における知の拠点としての役割を担っております。今後は研究成果を上げていくと共に、社会貢献できる人材を育成することが本学科の目的でもあります。